

● 令和7年（2025年）の日本の主な火山活動

【北海道地方】

アトサヌプリ [噴火予報（噴火警戒レベル1、活火山であること留意）]

硫黄山の噴気活動は低調に経過した。7月の上空からの観測（第一管区海上保安本部の協力による）では、硫黄山付近の噴気の状況に特段の変化は認められなかった。

地震活動は概ね低調に経過した。8月16日に硫黄山の北約2km付近で発生したマグニチュード2.2の地震で、弟子屈町サワンチサップで震度2を観測した。

GNSS連続観測では、2021年秋頃から2023年頃にかけてアトサヌプリ西側（硫黄山の西方約5km）の深部での膨張を示すと考えられる変化が認められたが、2025年1月頃以降は、2020年以前と同様にアトサヌプリカルデラを囲む基線で緩やかな短縮が認められる。

雌阿寒岳 [火口周辺警報（噴火警戒レベル2、火口周辺規制）]

火山活動は、9月上旬まで概ね低調に経過した。ポンマチネシリ火口付近では、9月11日から火山性地震がやや増加する中、12日に発生した火山性微動に伴い火口方向が上がる明瞭な傾斜変動が観測され、ポンマチネシリ96-1火口の噴煙の量が増加した。傾斜変動及び活発な噴煙活動はその後も継続し、9月15日の現地調査により、96-1火口内に新たな噴気孔の形成、ポンマチネシリ火口内及び近傍にわずかな火山灰の堆積を確認した。これらの状況から、15日15時20分に火口周辺警報を発表し、噴火警戒レベルを2（火口周辺規制）に引き上げた。

9月16日の上空からの観測（北海道の協力による）により、ポンマチネシリ火口周辺の南東から東側にもごくわずかな火山灰の堆積を確認した。9月12日から15日の間に96-1火口でごく小規模な噴火が発生したと考えられる。9月15日に採取した火山灰は、産業技術総合研究所の分析による

と主に熱水変質を受けたと考えられる粒子から構成される。96-1火口では、10月25日にもごく小規模な噴火が発生した。

ポンマチネシリ付近では、9月中旬以降も火口方向上がりの傾斜変動が緩やかに続き、火口付近浅部は膨張した状態が続いた。また、96-1火口付近地下の熱活動の高まりを示唆する全磁力値の減少傾向が続き、96-1火口の噴煙活動も9月上旬までと比べて活発な状態が継続した。GNSS連続観測では、8月末以降、おもに東側山麓の観測点で山体付近の膨張を示すと考えられるわずかな伸長傾向が認められる。

中マチネシリ火口付近では、GNSS連続観測及び繰り返し観測で2019年頃から浅部膨張を示す地殻変動が認められているが、地震活動は低調で噴気活動に活発化を示唆する特段の変化は認められていない。

丸山 [噴火予報（活火山であること留意）]

8月の上空からの観測（国土交通省北海道開発局の協力による）では、第1～第3火口に噴気は認められず、第3火口内の弱い地熱域の地表面温度分布にも特段の変化はなかった。

大雪山 [噴火予報（噴火警戒レベル1、活火山であること留意）]

旭岳地獄谷爆裂火口の噴気活動及び地震活動は低調に経過した。

8月の上空からの観測（国土交通省北海道開発局の協力による）及び現地調査では、旭岳地獄谷爆裂火口内の噴気の状況や地表面温度分布に特段の変化はなく、多くの噴気孔で噴気温度100℃以上（I-8噴気孔は200℃以上）の高温な状態が継続していた。また、GNSS繰り返し観測で、火山活動の活発化を示すと考えられる特段の変化は認められなかった。御鉢平に噴気は認められず、地表面温度分布に特段の変化はなかった。

本資料で用いる用語の解説については、「気象庁が噴火警報等で用いる用語集」を御覧ください。

<https://www.jma.go.jp/jma/kishou/know/kazan/kazanyougo/mokujii.html>

各火山の見出しの「噴火予報・警報」（噴火警戒レベル）は、2025年末時点の発表状況です。年間の発表の経緯は本文の記事と、一覧は本資料末尾を御覧ください。

本資料は、気象庁のほか、国土交通省北海道開発局、同東北、北陸、関東、中部、九州各地方整備局、国土地理院、海上保安庁、海上自衛隊、北海道大学、弘前大学、東北大学、東京大学、東京科学大学、名古屋大学、京都大学、九州大学、鹿児島大学、（国研）防災科学技術研究所、（国研）産業技術総合研究所、（国研）宇宙航空研究開発機構、北海道、（地独）北海道立総合研究機構エネルギー・環境・地質研究所、青森県、東京都、神奈川県温泉地学研究所、新潟県、山梨県、長野県、岐阜県、長崎県、大分県、宮崎県、鹿児島県、屋久島町、三島村、十島村、（公財）阿蘇火山博物館及び（公財）地震予知総合研究振興会のデータも利用して作成しています。（国研）は国立研究開発法人、（地独）は地方独立行政法人、（公財）は公益財団法人。）

十勝岳 [噴火予報（噴火警戒レベル1、活火山であることに留意）]

62-2火口の噴煙は2021年頃から高い状態が続いている、概ね火口縁上500m以下で経過した。また、隣接する振子沢噴気孔群の噴気の高さは概ね稜線上200m以下で経過し、2018年頃以降のやや高い状態が継続した。大正火口の噴気、前十勝の北西側斜面の弱い噴気の状況に特段の変化はなかった。5月、6月、7月及び10月に山麓の高感度監視カメラにより62-2火口の火映等の発光現象を観測した日があった。いずれもごく微弱で断続的に数時間継続する程度の現象であった。62-2火口内での高温ガス噴出や硫黄燃焼等によるものと考えられる。

6月及び7月の現地調査では、62-2火口内及び隣接する振子沢噴気孔群で高温の火山ガス噴出や昇華硫黄付着を確認するなど、活発な熱活動が継続していた。赤外熱映像観測装置による観測では、2024年6月の観測と比較して62-2火口の火口温度がやや上昇しており、2020年頃からの高温状態が維持されていた。また、7月及び8月の上空からの観測（7月は第一管区海上保安本部、8月

（2回）は国土交通省北海道開発局の協力による）では、2024年と比べ、各火口等の噴煙や噴気の状態及び地表面温度分布等に特段の変化は認められなかった。

3月に実施した火山ガス（二酸化硫黄）観測では、1日あたりの放出量は約300トンで、2024年と比べて同程度だった（2024年2月、9月に実施。それぞれ1日あたり約400トン、約200トン）。

火山性地震は少ない状態で経過し、震源は主に62-2火口付近のごく浅いところ、旧噴火口付近及びグラウンド火口付近のごく浅い所～深さ1kmに分布した。火山性微動は1月に1回、7月に2回、11月及び12月にそれぞれ1回発生した。一部の火山性地震及び火山性微動と同期して、主に62-2火口の周辺の傾斜計でわずかな傾斜変動を観測した。

GNSS連続観測及び6月に実施した繰り返し観測によると、2021年以降の山体浅部の収縮傾向が続いている。ただし、2022年以降は次第に鈍化し、2024年秋以降は一部の基線で概ね停滞している。山体深部の動きを示すと考えられる特段の地殻変動は観測されていない。

利尻山 [噴火予報（活火山であることに留意）]

8月の上空からの観測（国土交通省北海道開発局の協力による）では、北西側の溶岩ドーム群及び南側スコリア丘群付近に噴気や地熱域は認められず、地形や植生にも特段の変化はなかった。

樽前山 [噴火予報（噴火警戒レベル1、活火山であることに留意）]

山頂溶岩ドーム周辺の各火口及び噴気孔の噴気活動は低調だが、2021年秋以降やや増大し、その状態が続いている。

4月、7月、8月及び9月の上空からの観測（4月、8月及び9月は国土交通省北海道開発局、7月は第一管区海上保安本部の協力による）及び6月の現地調査では、山頂溶岩ドーム周辺の噴気の状況や地表面温度分布に特段の変化はなく、高温状態が継続していた。A火口では、2020年6月の観測以降に火口温度の低下傾向が認められていたが、2025年6月と2024年6月の温度は概ね同程度だった。

地震活動は概ね静穏に経過し、震源は主に山頂溶岩ドーム直下の浅部に分布した。

GNSS連続観測及び6月の山頂付近のGNSS繰り返し観測では、地殻変動に特段の変化は観測されなかった。

俱多楽 [噴火予報（噴火警戒レベル1、活火山であることに留意）]

各火口の噴気活動及び地震活動は低調に経過した。GNSS連続観測では、地殻変動に特段の変化は認められなかった。

4月、9月の上空からの観測（国土交通省北海道開発局の協力による）及び10月の現地調査では、日和山山頂爆裂火口や大湯沼等、火口想定域の噴気や地表面温度分布の状況に熱活動の活発化を示す特段の変化はなかった。

有珠山 [噴火予報（噴火警戒レベル1、活火山であることに留意）]

山頂火口原の噴気活動及び地震活動は低調に経過した。GNSS連続観測では、山頂部を挟む基線で1977年噴火に伴う貫入岩体の熱収縮によると考えられる短縮の変化が引き続き認められている。

4月、7月、9月及び10月の上空からの観測（4月及び9月は国土交通省北海道開発局、7月は第一管区海上保安本部、10月は北海道の協力による）では、山頂火口原、昭和新山、西山西麓火口群及び金比羅山火口群の状況に特段の変化はなかった。

羊蹄山 [噴火予報（活火山であることに留意）]

9月の上空からの観測（国土交通省北海道開発局の協力による）では、山頂火口周辺には噴気や地熱域は認められず、地形や植生にも特段の変化はなかった。

ニセコ【噴火予報（活火山であることに留意）】

9月の上空からの観測（国土交通省北海道開発局の協力による）では、イワオヌプリや五色温泉周辺に噴気や地熱域は認められず、地形や植生にも特段の変化はなかった。

北海道駒ヶ岳【噴火予報（噴火警戒レベル1、活火山であることに留意）】

山頂の火口カメラでは、昭和4年火口からのごく弱い噴気を度々観測した。一方、山麓の高感度監視カメラでは、4月に1日観測したのみだった。

8月、9月及び12月の上空からの観測（国土交通省北海道開発局及び北海道の協力による）及び5月の現地調査では、山頂火口原の各火口の噴気や地熱域の状況に特段の変化はなかった。

地震活動は低調に経過し、火山性微動は発生しなかった。

5月のGNSS繰り返し観測では、昭和4年火口を囲む基線で、2015年頃から見られていた昭和4年火口付近を囲む基線の伸長傾向に鈍化が認められた。GNSS連続観測では、2022年夏頃から2024年夏頃にかけて山頂火口原付近を挟む一部基線でわずかな伸長が見られたが、以降、特段の変化は認められない。ただし、2001年の観測開始以降、断続的に伸長が認められている。

恵山【噴火予報（噴火警戒レベル1、活火山であることに留意）】

2月22日に火口方向が上がる小さな傾斜変動に伴い振幅の小さな火山性地震が一時的にやや増加したが、その他の期間は少なく、地震活動は低調に経過した。また、恵山溶岩ドーム西側の爆裂火口の噴気活動は低調に経過した。

8月、9月の上空からの観測（国土交通省北海道開発局の協力による）及び10月の現地調査では、各火口の噴気や地熱域の状況に特段の変化はなかった。

10月に実施したGNSS繰り返し観測では、2023年10月と比べて火口原浅部のごくわずかな膨張を示唆する基線長の変化が認められた。

渡島大島【噴火予報（活火山であることに留意）】

8月の上空からの観測（国土交通省北海道開発局の協力による）では、寛保岳に噴気は認められず、寛保岳南東側内壁の弱い地熱域の地表面温度分布にも特段の変化はなかった。

【東北地方】**岩木山【噴火予報（噴火警戒レベル1、活火山であることに留意）】**

監視カメラでは、噴気は確認されなかった。

地震活動は低調に経過し、地殻変動には特段の変化はなかった。

10月の上空からの観測（青森県の協力による）では、湯ノ沢上流、赤沢上流、赤倉沢上流、鳥ノ海火口周辺に噴気や地表面の異常は認められなかった。

八甲田山【噴火予報（噴火警戒レベル1、活火山であることに留意）】

監視カメラでは、噴気は確認されなかった。

11月25日には一時的に火山性地震が増加したが、この地震の前後で火山活動に特段の変化は認められず、その他の期間では地震活動は低調に経過した。

地殻変動には特段の変化はなかった。

10月の上空からの観測（青森県の協力による）では、地獄沼周辺、酸ヶ湯沢上流の噴気や地表面の状況に特段の変化は認められなかった。

十和田【噴火予報（噴火警戒レベル1、活火山であることに留意）】

監視カメラでは、噴気は確認されず湖面の異常等も認められなかった。

3月30日に中湖付近の深さ約6kmを震源とする火山性地震が一時的に増加した。それらの地震のマグニチュードは最大で2.7であった。

9月28日には中湖付近の深さ約7kmを震源とする火山性地震が一時的に増加した。2023年以降、中湖付近の深さ5km前後が震源と推定される火山性地震の発生頻度がやや高い状態にある。

GNSS連続観測では、2023年前半から十和田湖を挟む東西の基線において、わずかな伸びの変化が認められている。

10月の上空からの観測（青森県の協力による）では、中湖付近に噴気や湖面の異常は認められなかった。

秋田焼山【噴火予報（噴火警戒レベル1、活火山であることに留意）】

焼山監視カメラ（国土交通省東北地方整備局）

では、湯沼及び叫沢 源頭部の噴気の高さは100m以下で、噴気活動は概ね低調に経過した。

地震活動は低調に経過した。

GNSS連続観測では、2020年中頃からの八幡平及び秋田焼山を挟む基線の伸びの変化が継続している。

3月の上空からの観測（陸上自衛隊東北方面隊の協力による）では、前回（2024年3月）の観測と比較して、叫沢源頭部、湯沼付近、湯ノ沢上流、トキワ沢上流及び叫沢中流域の噴気や地熱域の状況に特段の変化は認められなかった。

8月に実施した現地調査では、前回（2022年8

月）及び前々回（2017年9月）と比較して、叫沢源頭部及び湯沼の噴気や地熱域の状況に特段の変化は認められなかった。空沼では、引き続き噴気及び地熱域は認められなかった。

八幡平 [噴火予報（活火山であることに留意）]

GNSS 連続観測で2020年中頃からみられている、八幡平及び秋田焼山周辺での膨張性の地殻変動は継続している。広域地震観測網による地震観測では、八幡平東部の茶臼岳周辺でややまとまった地震活動がみられている。

3月の上空からの観測（陸上自衛隊東北方面隊の協力による）では、前回（2024年3月）の観測と比較して、よんご沼南の噴気や地熱域の状況に特段の異常は認められなかった。また、八幡平山頂付近や茶臼岳周辺、^{もつこ}畚岳から源太ヶ岳の周辺に噴気や地熱域は認められなかった。

岩手山 [火口周辺警報（噴火警戒レベル2、火口周辺規制）]

傾斜計やひずみ計、GNSS 連続観測では、2024年2月以降、東岩手山のやや深部の開口割れ目や山体西側のやや深部の膨張を示す地殻変動が観測されている。GNSS 連続観測では、2024年後半からこの地殻変動に伴う基線長の変化に鈍化が認められている。一方、ひずみ計では2025年10月以降、2024年前半頃と類似したひずみの変化が再び観測されている。このことは、東岩手山のやや深部の開口割れ目の再膨張を示すと考えられる。

JAXA の衛星「だいち2号」及び「だいち4号」の観測データを用いた国土地理院による干渉SAR 解析結果によると、積雪前の10月初旬まで、大地獄谷付近のごく浅いところ及び山体西側のやや深部の膨張を示すと考えられる地盤変動がみられた。

2024年7月頃から火山性地震の発生頻度は、やや多い状態で推移している。6月3日には一時的に地震回数が増加し、最大でマグニチュード3.1の地震を観測した。この地震により岩手県八幡平市で最大震度2を観測した。8月中旬以降は回数が減少したが、引き続き発生している。

山頂やや深部の低周波地震¹⁾については、2024年12月中旬頃から発生頻度がやや高い状態で経過している。

3月及び4月の上空からの観測（陸上自衛隊東北方面隊及び岩手県の協力による）によると、2024年2月の観測結果と比較した場合、黒倉山・姥倉山鞍部の地熱域がわずかに拡大している可能性がある。岩手山山頂、黒倉山山頂、黒倉山東側崖面、西小沢及び大地獄谷の噴気や地熱域の状況に特段の変化は認められなかった。

9月に実施した無人航空機（ドローン）による調査では、前回（2024年10月）の観測と比較して、大地獄谷の地熱域でわずかな地熱域の拡大と一部領域の温度上昇が認められた。一方、黒倉山・姥倉山鞍部や黒倉山山頂の状況に特段の異常は認められなかった。

10月に実施した現地調査では、前回（2024年9月）と比較して、黒倉山西斜面や黒倉・姥倉鞍部の地熱域は一部でわずかな縮小がみられたものの、大きな変化は認められなかった。

秋田駒ヶ岳 [噴火予報（噴火警戒レベル1、活火山であることに留意）]

山頂付近では2017年9月以降、そのうち女岳付近では2018年9月頃から火山性地震の発生頻度がやや高い状態が継続している。また、1月から3月にかけて、山頂付近が震源と推定される低周波地震が9回、3月27日には振幅の小さな火山性微動が2回発生した。火山性微動が観測されたのは、2018年4月3日以来である。

女岳付近では、地熱活動が継続的に認められているが、仙岩峠監視カメラ（国土交通省東北地方整備局）では、女岳の噴気の高さは70m以下で、噴気活動は低調に経過した。地殻変動には特段の変化はなかった。

3月の上空からの観測（陸上自衛隊東北方面隊の協力による）では、前回（2024年3月）の観測と比較して、女岳付近の噴気や地熱域の状況に大きな変化は認められなかった。

鳥海山 [噴火予報（噴火警戒レベル1、活火山であることに留意）]

監視カメラでは、噴気は確認されなかった。火山性地震は観測されず、地殻変動には特段の変化はなかった。

栗駒山 [噴火予報（噴火警戒レベル1、活火山であることに留意）]

地震活動及び噴気活動は低調で、地殻変動にも特段の変化はなかった。火山性微動は観測されなかった。

3月の上空からの観測（陸上自衛隊東北方面隊の協力による）では、これまでの観測と比較してゼッタ沢上流、ゆげ山及び地獄釜の噴気や地熱域の状況に特段の変化はなかった。昭和湖に噴気や地熱域は認められなかった。

蔵王山 [噴火予報（噴火警戒レベル1、活火山であることに留意）]

地震活動は低調で、地殻変動にも特段の変化はなかった。火山性微動及び長周期地震²⁾は観測されなかった。

監視カメラでは、丸山沢で12月に一時的に200mの高さの噴気を観測したが、その他の期間に噴気は認められなかった。藏王山御釜監視カメラ（国土交通省東北地方整備局）等では、御釜付近に噴気や地熱域は認められなかった。

2月の上空からの観測（陸上自衛隊東北方面隊の協力による）では、前回（2024年2月）の観測と比較して、丸山沢噴気地熱地帯の噴気や地熱域の状況に特段の変化はみられなかった。また、御釜周辺、振子沢付近に噴気や地熱域は認められなかった。

9月に実施した現地調査では、御釜周辺に噴気や地熱域は認められなかった。また、御釜湖面に白濁、気泡等の異常も認められなかった。

吾妻山【噴火予報（噴火警戒レベル1、活火山であることに留意）】

地震活動は低調に経過した。

浄土平傾斜計では、2023年9月下旬から大穴火口方向の沈降を示す変化がみられていたが、2025年5月中旬以降、概ね停滞している。

2023年以降高い値で推移していた火山ガスのSO₂（二酸化硫黄）とH₂S（硫化水素）の濃度比は、2024年11月以降、概ね静穏期の水準の値で経過している。

全磁力観測では、大穴火口浅部の熱消磁を示唆する変化は2023年後半から鈍化し、現在は概ね停滞している。

監視カメラでは、大穴火口で一時的に200mの高さの噴気を観測したが、噴気の高さは概ね100m以下で経過した。

2月の上空からの観測（陸上自衛隊東北方面隊の協力による）では、大穴火口周辺の地熱域の状況に特段の変化は認められなかった。5月及び11月に実施した現地調査では、前回（2024年5月及び2024年10月）の観測と比較して、大穴火口周辺の地熱域の状況に大きな変化は認められなかった。

安達太良山【噴火予報（噴火警戒レベル1、活火山であることに留意）】

監視カメラでは、噴気は認められなかった。

地震活動は低調に経過し、地殻変動には特段の変化はなかった。

2月の上空からの観測（陸上自衛隊東北方面隊の協力による）では、前回（2024年2月）の観測と比較して、沼ノ平火口付近及び鉄山南斜面の地熱域の状況に特段の変化はなく、噴気は認められなかった。

磐梯山【噴火予報（噴火警戒レベル1、活火山であることに留意）】

監視カメラでは、山体北側火口壁の噴気は100

m以下で経過し、噴気活動は低調であった。

2022年11月以降、火山性地震の発生頻度はやや多い状態で経過している。また、2025年12月には火山性地震が一時的に増加した。火山性微動は4月に2回観測された。

地殻変動には特段の変化はなかった。

2月の上空からの観測（陸上自衛隊東北方面隊の協力による）では、前回（2024年2月）の観測と比較して、沼ノ平、山体北側火口壁噴気地帯及び中ノ湯の噴気と地熱域に特段の変化は認められなかった。5月に実施した現地調査でも、山体北側火口壁噴気地帯の地熱域及び噴気の状況に特段の変化や異常は認められなかった。

【関東・中部地方、伊豆・小笠原諸島】

那須岳【噴火予報（噴火警戒レベル1、活火山であることに留意）】

地震活動及び噴煙活動は低調で、地殻変動にも特段の変化は認められなかった。

11月に実施した現地調査では、西斜面（無間地獄）の地熱域の広がりや西斜面の噴気孔Aの温度に前回（2024年7月）と比較して大きな変化は認められなかったが、噴気量は2021年4月と比較して低下傾向にある。北西斜面では噴気及び地熱域は認められなかった。

日光白根山【噴火予報（噴火警戒レベル1、活火山であることに留意）】

地震活動は低調で、地殻変動にも特段の変化は認められなかった。監視カメラでは噴気は観測されなかった。

草津白根山（白根山（湯釜付近））【火口周辺警報（噴火警戒レベル2、火口周辺規制）】

湯釜付近を震源とする火山性地震は2024年5月下旬以降、増加していたが、2025年8月3日頃からさらに増加した。2024年6月頃から、湯釜付近の地下浅部の膨張を示すと考えられる緩やかな地殻変動が認められ、また、噴気の化学成分比には、活発化を示す変化が認められている。このため、8月4日に火口周辺警報を発表し、噴火警戒レベルを2（火口周辺規制）に引き上げた。

9月6日には傾斜変動を伴う振幅の小さな火山性微動が発生し、地震も一時的に増加した。その後も火山性地震はやや多い状態が続き、傾斜変動を伴う火山性微動も9月から10月にかけて時折見られていたが、火山性地震は10月中旬以降、減少傾向が認められている。傾斜変動は10月中旬以降、鈍化しながらも継続している。GNSS連続観測では、白根山の西側を挟む基線で7月頃から認められていたわずかな伸びは、10月以降鈍化

している。全磁力観測では、2025年に入り、湯釜付近の地下の温度上昇を示唆する変化が認められている。水釜北東斜面の一部では、2024年7月頃からみられていた周辺の非地熱域と比較して温度の高い箇所が、12月頃から次第に不明瞭となっていたが、7月以降、再び温度の高まりが認められている。

奥山田監視カメラ（湯釜の北約1.5km）では、湯釜北側噴気地帯の噴気は高さ200m以下で推移しており、特段の変化は認められなかった。気象研究所、東海大学、東京科学大学による湯釜湖水の成分分析では、8月以降、湖水のClとSO₄濃度が増加し、9月以降は特にSO₄の割合の増加が認められる。

5月から7月に実施した現地調査では、湯釜火口内北東側火口壁、湯釜火口北側及び北東側斜面の地熱域に特段の変化は認められなかった。6月と11月に実施した上空からの観測（陸上自衛隊の協力による）でも、湯釜火口内の北東側火口壁面、湯釜火口北側及び水釜北東斜面の地熱域の分布に特段の変化は認められなかった。

草津白根山（本白根山）【噴火予報（噴火警戒レベル1、活火山であることに留意）】

今期間噴気は観測されなかった。本白根山火口及び逢ノ峰付近を震源とする地震は、少ない状態で経過した。火山性微動は観測されなかった。GNSS連続観測では、火山活動によるとみられる変動は認められなかった。

5月に鏡池北火口で実施した現地調査では、前回の観測（2024年5月）と同様に噴気は認められず、日射の影響を超えるような地熱域はみられなかった。6月と11月に実施した上空からの観測（陸上自衛隊の協力による）でも、鏡池北火口及びその周辺で噴気は認められず、日射の影響を超えるような地熱域は確認されなかった。

浅間山【火口周辺警報（噴火警戒レベル2、火口周辺規制）】

山体浅部を震源とする火山性地震は、2024年4月中旬以降増加した状態が続いているが、2025年7月頃から減少傾向がみられている。火山ガス（二酸化硫黄）の1日あたりの放出量は70～700トンで、5月頃までは概ね500トン前後と、2023年3月以前に比べて多い状態だったが、6月頃からやや減少し概ね200トン前後で経過した。山体の西側での膨張を示すと考えられる傾斜変動は、2024年5月以降、停滞している。

6月と11月に実施した上空からの観測（陸上自衛隊の協力による）では、噴気孔の位置や地形等に変化はみられず、火口底や火口周辺に新たな噴出物の形跡は認められなかった。赤外熱映像装置による観測では、地表面温度の分布に特段の変

化はみられなかったが、11月の観測では6月の観測及び前年（2024年11月）の観測と比較して、火口底中央部の火孔付近の温度が低くなっていた。

新潟焼山【噴火予報（噴火警戒レベル1、活火山であることに留意）】

噴煙活動及び地震活動は、低調に経過した。6月下旬に新潟焼山の山頂から東約3km付近の浅い地震が観測された。同様の地震は、2006年、2010年、2015年、2017年及び2022年にも発生している。この地震の前後で、その他の観測データに変化はなかった。GNSS連続観測でも、火山活動によるとみられる変動は認められなかった。

4月に実施した上空からの観測（新潟県消防防災航空隊の協力による）では、前回（2024年8月）の観測に引き続き、東側噴気孔群のB噴気孔で白色の噴気が認められた。また、北北東側噴気孔群のC噴気孔で白色のごく弱い噴気が認められた。その他の噴気孔からの噴気は認められなかった。また、10月に実施した上空からの観測（陸上自衛隊第12旅団の協力による）では、前回（2025年4月）の観測に引き続き、東側噴気孔群のB噴気孔で白色の噴気が認められた。その他の噴気孔からの噴気は認められなかった。

妙高山【噴火予報（活火山であることに留意）】

4月に実施した上空からの観測（新潟県消防防災航空隊の協力による）および10月に実施した上空からの観測（陸上自衛隊第12旅団の協力による）では、火口原南側の地獄谷噴気地帯でこれまでと同様、白色の噴気が認められた。その他の領域で噴気は認められず、これまでの観測と比較して特段の変化はみられなかった。

弥陀ヶ原【噴火予報（噴火警戒レベル1、活火山であることに留意）】

今期間、地獄谷周辺の地震活動は、概ね低調に経過した。また、火山性微動は観測されなかった。地殻変動には特段の変化は認められなかった。一方、地獄谷では活発な熱活動が続いている。

5月に実施した上空からの観測（北陸地方整備局の協力による）では、地獄谷周辺で引き続き白色の噴気が上がっており、特に紺屋地獄や百姓地獄において活発な噴気活動を確認した。また、紺屋地獄周辺の雪面が火山ガスの影響で黄色く変色していることを確認した。立山カルデラでは、新湯で湯だまりと噴気を確認した。泥鰌池周辺の河川沿いでは、これまでの観測で熱活動が確認されているが、特段の変化は見られなかった。

10月に実施した現地調査では、2012年6月以降、噴気活動の活発化がみられる地獄谷で引き続

き活発な噴気活動が継続していた。また、噴気地帯に対応する地熱域が引き続き確認されたが、前回（2023年10月）と比較してその分布に大きな変化は認められなかった。

焼岳 [噴火予報（噴火警戒レベル1、活火山であることに留意）]

GNSS 連続観測で山頂付近の緩やかな膨張を示すと考えられる変化が続いているなか、3月3日から9日にかけて山頂付近を震源とする微小な火山性地震が増加した。このため、3月4日に火口周辺警報を発表し、噴火警戒レベルを2（火口周辺規制）に引き上げた。3月14日に実施した上空からの観測（岐阜県の協力による）では、以前から噴気が認められている岩坪谷噴気孔、北峰南側噴気孔及び隠居穴火口で噴気が認められた。これらの噴気孔を含め、山頂付近の噴気の状況に特段の変化は認められなかった。

その後、地震活動は低調に推移し、山頂付近の噴気の状況や地殻変動にも地震活動に伴う変化は認められず、火山活動は地震増加前の状態に戻ったことから、4月18日に噴火予報を発表し、噴火警戒レベルを2（火口周辺規制）から1（活火山であることに留意）に引き下げた。

ただし、GNSS 連続観測では、山頂付近での緩やかな膨張の可能性のある変化は継続しており、焼岳周辺では数年おきに震度1以上を観測する地震を含む活発な地震活動がみられることから、中長期的に焼岳の火山活動は高まってきている可能性がある。

7月に実施した現地調査では、北峰南斜面や隠居穴火口の噴気や地熱域の状況に特段の変化は認められなかった。8月に実施した無人航空機による上空からの観測では、北峰南側斜面や黒谷火口等で引き続き噴気が認められた。また、北側斜面や山頂周辺の従来からみられている箇所で、地熱域や噴気に対応した高温域が認められた。

乗鞍岳 [噴火予報（噴火警戒レベル1、活火山であることに留意）]

地震活動は低調で、地殻変動にも特段の変化は認められなかった。監視カメラでは噴気は観測されなかった。

5月7日に乗鞍岳の北2km付近を震源とする地震が一時的に増加したが、噴気などは観測されず、傾斜計等に変化はなく、火山活動の活発化は認められなかった。11月21日に乗鞍岳の南2km付近を震源とするマグニチュード2.8の地震が発生し、高山市で震度2を観測したが、この地震活動に伴い噴気などは観測されず、傾斜計等に変化はなく、火山活動の活発化は認められなかった。

御嶽山 [噴火予報（噴火警戒レベル1、活火山であることに留意）]

2024年12月中旬以降、剣ヶ峰山頂付近の直下を震源とする火山性地震がやや多い状態で推移し、2025年1月16日にはさらに増加した。このため、同日に火口周辺警報を発表し、噴火警戒レベルを2（火口周辺規制）に引き上げた。21日には継続時間が約14分間の、傾斜変動を伴う火山性微動が発生した後に地震回数が急増し、同日の日回数は309回に達した。また火山性微動の発生後、剣ヶ峰山頂の南西側斜面（地獄谷火口）の一部噴気孔で噴気活動が再開しているのが認められた。3月に実施した上空からの観測（岐阜県の協力による）では、噴気の状況に特段の異常は認められなかったが、一部の噴気孔から泥水が流れ出したとみられる痕跡が認められた。火山性地震は1月22日以降、次第に減少し、また、GNSS 連続観測では、2024年12月頃から一部の基線でわずかな伸びがみられていたが、2025年2月頃から停滞している。これらのことから、5月20日に噴火予報を発表し、噴火警戒レベルを2（火口周辺規制）から1（活火山であることに留意）に引き下げた。その後、地震活動は低調に経過し、傾斜計及びGNSS 連続観測では、火山活動によるとみられる特段の地殻変動は認められてない。

8月に実施した現地調査では、一ノ池及び二ノ池で噴気や地熱域は認められず、また、地獄谷火口の一部の噴気孔で引き続き活発な噴気活動と地熱域が認められた。

白山 [噴火予報（噴火警戒レベル1、活火山であることに留意）]

地震活動は低調で、地殻変動にも特段の変化は認められなかった。監視カメラでは噴気は観測されなかった。

9月に実施した上空からの観測（北陸地方整備局の協力による）では、白山周辺で噴気は認められなかった。

富士山 [噴火予報（噴火警戒レベル1、活火山であることに留意）]

地震活動は低調に経過した。深さ15km付近を震源とする深部低周波地震は低調に経過した。監視カメラでは噴気は観測されず、地殻変動にも特段の変化は認められなかった。

箱根山 [噴火予報（噴火警戒レベル1、活火山であることに留意）]

監視カメラによる観測では大涌谷の火口や噴気孔及び温泉供給施設から引き続き噴気が勢いよく噴出していた。

地震活動は概ね低調に経過したが、7月20日から芦ノ湖の南部付近を震源とする地震が一時

的に増加し、21日04時28分頃および23日21時49分頃に発生した地震では、箱根町湯本などで最大震度2を観測した。同月27日以降、地震回数は減少した。その他の観測データには特段の変化は認められなかった。

地殻変動観測では、火山活動によるとみられる特段の変化は認められなかった。

伊豆東部火山群 [噴火予報（噴火警戒レベル1、活火山であること留意）]

地震活動は概ね低調に経過したが、1月27日から30日にかけて、また2月27日に、初島から西南西に約5km離れた領域を震源とする地震が一時的に増加した。火山性微動は観測されず、地殻変動にも特段の変化は認められなかった。監視カメラでは噴気は観測されなかった。

伊豆大島 [噴火予報（噴火警戒レベル1、活火山であること留意）]

現地調査や監視カメラによる観測では、三原山山頂火口内やその周辺、剣ヶ峰付近や三原新山付近の噴気活動は低調で、地熱域にも特段の変化は認められなかった。

火山性地震は期間を通して少ない状態で経過したが、9月9日から10日にかけて伊豆大島の西方沖を震源とする地震が増加した。11日以降、地震回数は減少した。火山性微動の発生はなかった。

長期的に継続していた山体の膨張は、2018年頃からほぼ停滞しているが、これまでに供給されたマグマは地下深部に蓄積されていると考えられる。約1～3年周期で膨張と収縮を繰り返す地殻変動は、2025年9月頃から概ね停滞している。

新島 [噴火予報（噴火警戒レベル1、活火山であること留意）]

地震活動は概ね低調で、地殻変動にも特段の変化は認められなかった。監視カメラでは噴気は観測されなかった。

6月28日に新島付近を震源とするマグニチュード1.8の地震が発生し、新島村で震度1を観測したが、この地震の前後で新島の火山活動に特段の変化は認められなかった。

神津島 [噴火予報（噴火警戒レベル1、活火山であること留意）]

地震活動は概ね低調で、地殻変動にも特段の変化は認められなかった。監視カメラでは噴気は観測されなかった。

三宅島 [噴火予報（噴火警戒レベル1、活火山であること留意）]

6月17日10時から14時にかけて山頂火口直下

を震源とする微小な火山性地震が増加し、また、山頂付近の隆起を示すと考えられる傾斜変動が11時頃から13時頃にかけて認められた。このため、17日12時50分に火口周辺警報を発表し、噴火警戒レベルを2（火口周辺規制）に引き上げた。地震回数は17日以外少ない状態で経過し、傾斜変動も停滞した。地震の増加に伴う噴煙活動の変化は認められず、また、同月18日に実施した現地調査では、火山ガス（二酸化硫黄）は検出されなかった。これらのことから、7月18日に噴火予報を発表し、噴火警戒レベルを2（火口周辺規制）から1（活火山であること留意）に引き下げた。

その後、地震活動や噴煙活動は低調で、火山ガス放出量も極めて少ない状態で経過した。しかし、中長期的には、山体深部の膨張を示す地殻変動が続いていることから、地下のマグマの蓄積が進んでいると考えられる。

山頂火口北西監視カメラによる観測及び現地観測、また8月に実施した上空からの観測（陸上自衛隊の協力による）によると、山頂火口内の主火孔及びその周辺で引き続き地熱域が認められる。山頂火口全体では2022年以降に地熱域の温度上昇や放熱率の増加傾向が認められており、主に主火孔周辺の地熱域で温度上昇や放熱率の増加がみられる。山頂火口内の地形、噴気に特段の変化は認められない。

八丈島 [噴火予報（噴火警戒レベル1、活火山であること留意）]

地震活動は低調で、地殻変動にも特段の変化は認められなかった。監視カメラでは噴気は観測されなかった。

青ヶ島 [噴火予報（噴火警戒レベル1、活火山であること留意）]

地震活動は低調で、地殻変動にも特段の変化は認められなかった。監視カメラでは噴気は観測されず、丸山西斜面とカルデラの西側内壁の地熱域にも特段の変化は認められなかった。

10月に実施した現地調査では、丸山西斜面、外輪山の内側西斜面、丸山北東側で目視・赤外熱映像観測を実施した結果、前回（2016年3月）と比べ地熱域に特段の変化は認められず、噴気は確認されなかった。

ベヨネース列岩 [噴火警戒（周辺海域警戒）及び火山現象に関する海上警報]

今期間、気象衛星ひまわりでは噴火は認められなかった。3月12日、4月11日、5月14日、10月23日、12月17日に海上保安庁が実施した上空からの観測では、ベヨネース列岩及び明神礁付近で変色水域等の特異事象は認められなかった。

須美寿島 [噴火警報（周辺海域警戒）及び火山現象に関する海上警報]

今期間、気象衛星ひまわりでは噴火は認められなかつた。海上保安庁が実施した上空からの観測では、1月27日に南岸～西岸～北岸にかけて青白色の変色水が認められた。3月12日に西岸から西側約300mにかけて薄い青白色の変色水が認められた。9月30日に南岸より西側約1,800mにかけて帯状に黄白色から青白色の変色水が認められた。10月23日に南西岸より西側約400mにかけて薄い黄緑色の変色水が認められた。12月17日に南岸より南側約600mにわたり黄白色の変色水が認められた。

伊豆鳥島 [噴火予報（活火山であることに留意）]

海上保安庁が実施した上空からの観測では、12月17日に北岸の一部で少量の茶褐色、乳白色の変色水が認められた。その他、特異事象は認められなかつた。

孀婦岩 [噴火予報（活火山であることに留意）]

海上保安庁が実施した上空からの観測では、12月17日に島の東端でごく少量の乳白色の変色水が認められた。その他、特異事象は認められなかつた。

西之島 [火口周辺警報（入山危険）及び火山現象に関する海上警報]

気象衛星ひまわりによる観測では、噴火は確認されなかつた。西之島付近の地表面温度も周囲とほとんど変わらない状態で経過した。

海洋気象観測船「凌風丸」が実施した海上からの観測、及び1月から12月にかけて行われた海上保安庁による上空からの観測では、引き続き、火碎丘中央火口内や周辺で複数の白色噴気の放出及び硫黄昇華物の分布が確認され、島のほぼ全周に広範囲の変色水域が確認された。また、緑白色～灰白色の火口湖と、火口湖表面から水蒸気が上がっているのが確認された。

海徳海山 [噴火予報（活火山であることに留意）]

2023年5月から2025年2月までに繰り返し実施された海上保安庁による上空からの観測では、周辺海域での噴火は確認されず、顕著な変色水等の特異事象も認められなかつた。

のことから、海徳海山の周辺海域に影響を及ぼす噴火が発生する可能性は低くならんと判断し、2月14日11時00分に噴火警報（周辺海域）を解除し、噴火予報（活火山であることに留意）に引き下げた。合わせて、火山現象に関する海上警報を解除した。

硫黄島 [火口周辺警報（火口周辺危険）及び火山現象に関する海上警報]

海上自衛隊硫黄島航空基地隊によると、翁浜沖で1月28日から2月14日にかけて噴火が継続して認められた。この噴火活動では、灰色、または黒色の噴出物を含む水柱が概ね数分程度の間隔で、海面から最大で20m程度の高さまで上がり、また、噴火地点付近では変色水や軽石の浮遊も確認された。

海上自衛隊の協力により気象庁が実施した現地調査では、2月6日に翁浜沖の噴出地点付近で噴出物の堆積により形成されたと考えられる陸地を確認した。13日に海上保安庁が実施した上空からの観測でもこの陸地が確認されたが、3月12日の観測では浸食等により消失していた。

また、9月1日に千鳥ヶ浜で噴火が発生した。阿蘇台東監視カメラ（井戸ヶ浜の噴火地点から南東約1,700m）による観測では、噴煙は高さ1,000m以上まで上がった。3日から7日にかけては、高温の噴出物を含む噴煙も観測された。また、海上自衛隊硫黄島航空基地隊によると、5日に島西部の旧噴火口（通称：ミリオンダーホール）で高さ50～100m程度の白色噴気が観測され、同隊より提供された8日に撮影された写真では、ミリオンダーホールから白色噴気が上がっているのが認められ、その北側には複数の新たな火口地形が認められた。その後、噴火は散発的になり、千鳥ヶ浜では10月以降、火口湖が形成され、噴火は観測されていない。

海上自衛隊硫黄島航空基地隊によると、10月3日、7日及び24日に、島北西部の井戸ヶ浜で噴火が確認された。また、17日に翁浜沖のこれまで噴火がみられた地点で、噴火が確認された。この翁浜沖の噴火では、高さ10～30m程度の黒色の噴煙及び海面の変色が認められた。

翁浜沖及び千鳥ヶ浜での噴火に伴い、単色型微動³⁾が断続的に観測された。火山性地震は千鳥ヶ浜での噴火に先行して8月30日から増加し、9月1日には日回数が700回に達した。7日以降、地震は次第に減少した。GNSS連続観測では、長期的な島全体の隆起が継続するなかで、8月30日頃から通常より大きな隆起が観測された。その後、9月5日頃から沈降に転じたが、10月中旬頃から停滞し、11月に入り隆起に転じている。

福德岡ノ場 [噴火警報（周辺海域警戒）及び火山現象に関する海上警報]

気象衛星ひまわりでは噴火は認められなかつた。1月から3月、8月、10月に海上保安庁が実施した上空からの観測では、変色水が確認され、2月と3月の観測では福德岡ノ場周辺に少量の浮遊物が認められた。

【九州地方、南西諸島】

鶴見岳・伽藍岳【噴火予報（噴火警戒レベル1、活火山であることに留意）】

噴気地帯の状況に特段の変化はない。

火山性地震は概ね少ない状態で経過したが、10月下旬には鶴見岳付近で一時的に増加した。また、長期的には鶴見岳付近が震源と推定されるB型地震⁴⁾が時々発生している。

地殻変動観測では、特段の変化は認められていない。

九重山【噴火予報（噴火警戒レベル1、活火山であることに留意）】

硫黄山付近の噴気活動は低調に経過した。

火山性地震は少ない状態で経過したが、10月頃からやや増加しており、B型地震も時々発生している。

地殻変動観測では特段の変化は認められていない。

噴気地帯の状況に特段の変化は認められない。地熱域では、長期的には温度の低下や縮小傾向がみられている。

硫黄山付近の噴気地帯地下の温度上昇（熱消磁）を示唆する全磁力の変化は継続している。

阿蘇山【噴火予報（噴火警戒レベル1、活火山であることに留意）】

火山性微動の振幅は7月上旬に一時的に増大したが、概ね小さな状態で経過した。

火山ガス（二酸化硫黄）の放出量は、1日あたり1,000トン未満と少ない状態で経過した。

現地調査では、中岳第一火口の湯だまり⁵⁾量は2024年11月に約8割となり、その後特段の変化はみられていない。南側火口壁の地熱域では最高温度が低下し、7月以降は100°C未満で経過している。

GNSS連続観測では、深部にマグマだまりがあると考えられている草千里を挟む基線において、2024年10月頃から縮みの傾向がみられている。

噴火警報・予報の発表状況

7月4日 火口周辺警報発表

噴火警戒レベルを1から2に引上げ（微動振幅の増大）

7月25日 噴火予報発表

噴火警戒レベルを2から1に引下げ

雲仙岳【噴火予報（噴火警戒レベル1、活火山であることに留意）】

平成新山では噴気活動は低調に経過した。

火山性地震は少ない状態で経過した。主な震源は普賢岳から平成新山直下の浅いところで、橋湾付近における地震も時々発生した。火山性微動は観測されなかった。

地殻変動観測では、火山活動によると考えられる特段の変化は認められていない。

霧島山（えびの高原（硫黄山））【噴火予報（噴火警戒レベル1、活火山であることに留意）】

硫黄山の南側の噴気地帯では、噴気活動が活発な状態で経過し、一部の噴気孔からの泥の飛散や熱水の噴気孔外への流出を時折確認した。硫黄山の西側500m付近の噴気地帯では、2025年1月から2月にかけて弱い噴気を時々観測したが、3月以降噴気は認められていない。

現地調査や監視カメラによる観測では、硫黄山周辺の噴気地帯や、硫黄山の西側から南西側において地熱域を確認している。硫黄山の西側から南西側では、2024年頃から地熱域の衰退傾向が認められる。全磁力観測では、2016年2月の観測開始以来、硫黄山周辺の地下での温度上昇を示すと考えられる変化が観測されている。

硫黄山付近では、火山性地震は少ない状態で経過した。火山性微動は観測されていない。硫黄山近傍の地震計では、9月から12月にかけて、噴気活動に伴うとみられる震動の振幅の増減を断続的に確認した。

韓国岳周辺や大浪池付近などえびの高原周辺では、地震活動は低調に経過した。

GNSS連続観測では、2023年5月頃から硫黄山の山体浅部における膨張を示すと考えられるわずかな伸びがみられていたが、同年11月頃から停滞している。

霧島山（大幡池）【噴火予報（噴火警戒レベル1、活火山であることに留意）】

噴気は認められなかった。現地調査では大幡池の湖底からの火山ガスの噴出を確認した。

火山性地震は少ない状態で経過した。火山性微動は観測されなかった。

地殻変動観測でも特段の変化は認められていない。

霧島山（新燃岳）【火口周辺警報（噴火警戒レベル2、火口周辺規制）】

6月22日に新燃岳火口内の北東側において噴火が発生し、その後も断続的な噴火活動がみられた。7月3日頃から火口内の南東側においても噴火が発生した。7月中旬以降、噴火活動は次第に間欠的となり、9月8日以降噴火は発生

していない。一連の噴火活動において、噴煙の最高高度は火口縁上5,500mまで上がった。監視カメラにより大きな噴石の飛散は確認されていない。産業技術総合研究所の分析によると、7月2日頃以降の火山灰には、今回新たに供給されたマグマの可能性がある粒子が少量含まれていた。

新燃岳火口直下を震源とする火山性地震は、2024年10月下旬頃から増減を繰り返し、6月22日の噴火発生前までその増分が次第に大きくなっていた。6月下旬の噴火発生以降はやや減少したもの、概ね多い状態で経過している。火山性微動は時々発生し、3月30日には新燃岳の隆起及び沈降を示す傾斜変動を伴う火山性微動を観測したほか、7月上旬頃からは噴火に伴う火山性微動が断続的に発生した。8月上旬からはその発生頻度が低下した。

火山ガス（二酸化硫黄）の放出量は、噴火発生翌日の6月23日には、1日あたり4,000トンと急増が認められた。7月以降、放出量は緩やかな低下傾向が認められる。

繰り返し実施した現地調査では、新燃岳西側斜面の割れ目付近にみられていた地熱域は、2025年10月頃から拡大傾向が認められる。

GNSS連続観測では、霧島山を挟む一部の基線で、2025年3月頃から霧島山深部の膨張を示すと考えられる伸びの傾向が認められている。なお、同基線では、2025年7月上旬に、新燃岳の噴火活動に対応すると考えられるわずかな縮みがみられた。2024年11月頃からみられた新燃岳付近の地下における膨張を示すと考えられる基線の伸びは、2025年7月以降は認められない。

噴火警報・予報の発表状況

3月30日 火口周辺警報発表

噴火警戒レベルを2から3（警戒が必要な範囲は新燃岳火口より概ね4km）に引上げ（火山性地震の急増と山体の膨張を示す傾斜変動）

4月2日 火口周辺警報発表

噴火警戒レベル3を切替え（警戒が必要な範囲を新燃岳火口より概ね4kmから概ね3kmに縮小）（傾斜データに特段の変化なし）

5月27日 火口周辺警報発表

噴火警戒レベルを3から2に引下げ（警戒が必要な範囲を新燃岳火口より概ね3kmから概ね2kmに縮小）（地震回数の減少）

6月23日 火口周辺警報発表

噴火警戒レベルを2から3（警戒が必要な範囲を新燃岳火口より概ね2kmから概ね3kmに拡大）に引上げ（火山ガス（二酸化硫黄）放出量の急増）

10月17日 火口周辺警報発表

噴火警戒レベルを3から2に引下げ（警戒が必要な範囲を新燃岳火口より概ね3kmから概ね2kmに縮小）（火山ガス（二酸化硫黄）放出量の減少）

霧島山（御鉢）[噴火予報（噴火警戒レベル1、活火山であることに留意）]

火口縁を越える噴煙は認められなかった。

火山性地震は少ない状態で経過し、火山性微動は観測されなかった。

地殻変動観測でも特段の変化は認められていない。

桜島[火口周辺警報（噴火警戒レベル3、入山規制）]

南岳山頂火口では噴火活動が継続しており、特に5月中旬から下旬頃には噴火活動が活発となつた。年間で噴火⁶⁾が361回発生し、このうち爆発は172回であった。大きな噴石は最大で5合目（南岳山頂火口より約1,400m）まで飛散し、噴煙は最高で火口縁上4,400mまで上がつた。また、同火口では、夜間に高感度の監視カメラで火映をほぼ連日観測した。

昭和火口では、噴火は発生していない。

火山ガス（二酸化硫黄）の1日あたりの放出量は、概ね多い状態で経過している。噴火活動が活発となつた5月20日には、1日あたり11,200トンと大きく増加した。

火山性地震は5月中旬及び12月下旬にやや多い状態となつたが、概ね少ない状態で経過した。また、主に噴火に伴う火山性微動を時々観測した。

桜島島内の傾斜計及び伸縮計では、5月中旬、7月上旬及び8月中旬に山体の膨張を示す変動が観測された。GNSS連続観測では、桜島島内の基線で2024年1月頃から山体収縮に伴うとみられるわずかな縮みが認められていたが、同年10月頃から停滞している。また、姶良カルデラ（鹿児島湾奥部）を挟む基線では長期にわたり姶良カルデラの地下深部の膨張を示す緩やかな伸びがみられている。姶良カルデラの地下深部には、マグマが長期にわたり蓄積した状態と考えられる。

薩摩硫黄島[火口周辺警報（噴火警戒レベル2、火口周辺規制）]

硫黄岳火口では、12月29日に噴火が発生し、噴煙が火口縁上200mまで上がつた。

同火口では、白色の噴煙が時々高く上がり、夜間に高感度の監視カメラで火映を観測するなど、長期的には熱活動が高まった状態で推移している。

火山性地震は少ない状態で経過した。火山性微

動は少ない状態であった。

火山ガス（二酸化硫黄）の放出量は1日あたり1,000トン前後の状態が継続している。

GNSS連続観測では、島内的一部の基線で2015年頃から長期的な縮みの傾向が認められている。

くちのえらぶじま 口永良部島 [噴火予報（噴火警戒レベル1、活火山であることに留意）]

口永良部島では、4月頃から6月頃にかけて主に古岳付近浅部を震源とするやや活発な地震活動がみられたが、7月頃から減少し少ない状態で経過した。新岳西側山麓のやや深いところを震源とする地震は発生しなかった。

GNSS連続観測では、2023年6月頃から10月頃にかけて古岳付近の膨張を示唆する変動が観測されたが、同年11月以降、山体のさらなる膨張を示す変動は認められていない。

繰り返し実施した山上における現地調査や上空からの観測では、古岳火口内やその周辺において噴煙を確認したが、概ね火口内に留まる程度であった。また、古岳火口内の地熱域は、2023年6月以前に比べると拡がった状態であるものの、特段の拡大傾向は認められない。なお、新岳の噴煙活動や地熱域の状況には特段の変化は認められていない。

火山ガス（二酸化硫黄）の1日あたりの放出量は100トン未満と少ない状態で経過した。

噴火警報・予報の発表状況

2月14日 噴火予報発表

噴火警戒レベルを2から1に引下げ

4月16日 火口周辺警報発表

噴火警戒レベルを1から2に引上げ（火山性地震の増加）

6月11日 火口周辺警報発表

噴火警戒レベルを2から3に引上げ（火山性地震の増加）

9月5日 火口周辺警報発表

噴火警戒レベルを3から2に引下げ（火山性地震の減少）

9月19日 噴火予報発表

噴火警戒レベルを2から1に引下げ

なかのしま 中之島 [噴火予報（活火山であることに留意）]

御岳火口の噴煙の状況に特段の変化は認められない。

広域地震観測網では、中之島島内で発生している地震は観測されていないが、長期的には御岳山体付近が震源と考えられる地震が時々発生している。火山性微動は観測されなかった。

地殻変動観測でも特段の変化は認められていない。

すねのせじま 諏訪之瀬島 [火口周辺警報（噴火警戒レベル2、火口周辺規制）]

おたけ 御岳火口では、噴火活動が継続し、爆発も時々発生した。

噴火に伴う火口周辺への大きな噴石の飛散を確認し、最大で火口中心から約800mまで飛散した。また、噴火に伴う噴煙は最高で火口縁上2,400mまで上がった。夜間は高感度の監視カメラにより火映を観測した。

島の周辺における地震活動は、2024年10月頃から高まった状態となっており、一時的な地震の増加が時々みられた他、体に感じる規模の地震も時々発生した。9月中旬には、主に島の西側において体に感じる地震が多発し、17日21時55分には、島内の震度観測点（鹿児島十島村諏訪之瀬島）で震度5弱を観測する地震が発生するなど、地震活動が特に活発となった。

GNSS連続観測では、2024年10月以降、島の西側におけるマグマの蓄積量の増加を示唆する変動が認められたが、2025年11月頃から停滞している。

火山ガス（二酸化硫黄）の放出量は、2024年から2025年3月頃にかけて1日あたり2,000トンの日が時々みられるなど、2023年と比較して増加した。その後は減少した状態で経過したが、7月から8月にかけては1日あたり3,000トン前後と多い日もみられた。

いおうとりしま 硫黄島 [噴火予報（活火山であることに留意）]

7月に気象庁の海洋気象観測船「啓風丸」が実施した海上からの観測では、硫黄岳火口で引き続き白色の噴気を確認し、風下側では火山ガスの臭気が感じられた。グスク火山火口周辺では、噴気は認められなかった。また、硫黄岳火口及びグスク火山火口周辺の海域では、変色水域は認められなかった。

8月に気象庁の海洋気象観測船「凌風丸」が実施した海上からの観測では、硫黄岳火口で引き続き白色の噴気を確認した。硫黄岳火口及びグスク火山火口周辺の海域では、変色水域は認められなかった。

1) 「低周波地震」（岩手山）

東岩手山では、山頂のやや深部（深さ6～9km付近）において、低周波地震の活動が認められる。この低周波地震の活動は、火山活動が静穏な状況下でもみられ、連続して発生することもあるため、噴火警戒レベルの判定基準に含めないこととしている。

2) 「長周期地震」（蔵王山）

蔵王山において、周期10秒程度の地震を指す。

浅い領域の熱水や火山ガスが関与していると考えられている。

3) 「単色型微動」

単一な周波数の微動。硫黄島の場合、翁浜沖で発生する海底噴火に際して、噴火の発生時刻に対応して発生しており、発震源は翁浜沖のごく浅いところと推定されている。

4) 「B型地震」

火山性地震のうち、相が不明瞭で、比較的周期が長く、火口周辺の比較的浅い場所で発生する地震。火道内のガスの移動やマグマの発泡などにより発生すると考えられている。

5) 「湯だまり」（阿蘇山）

阿蘇山の活動静穏期の中岳第一火口には、地下水などを起源とする約40~60°Cの緑色の湯がたまつておらず、これを湯だまりと呼んでいます。火山活動が活発化するにつれ、湯だまり温度が上昇・噴湯して湯量の減少や濁りがみられ、その過程で土砂を噴き上げる土砂噴出現象等が起ころり始めることが知られています。

6) 「噴火」（桜島）

桜島では噴火活動が活発なため、噴火のうち、爆発もしくは噴煙量が中量以上（概ね噴煙の高さが火口縁上1,000m以上）の噴火の回数を計数している。資料の噴火回数はこの回数を示す。また、基準に達しない噴火は、ごく小規模な噴火として噴火回数に含めない。

各火山の年内とその直前の噴火警報・予報発表一覧

雌阿寒岳

2018年12月21日 噴火予報（レベル1、活火山であることに留意）
2025年9月15日 火口周辺警報（レベル2、火口周辺規制）

草津白根山（白根山（湯釜付近））

2021年3月23日 噴火予報（レベル1、活火山であることに留意）
2025年8月4日 火口周辺警報（レベル2、火口周辺規制）

焼岳

2022年7月12日 噴火予報（レベル1、活火山であることに留意）
2025年3月4日 火口周辺警報（レベル2、火口周辺規制）
2025年4月18日 噴火予報（レベル1、活火山であることに留意）

御嶽山

2022年6月23日 噴火予報（レベル1、活火山であることに留意）
2025年1月16日 火口周辺警報（レベル2、火口周辺規制）
2025年5月20日 噴火予報（レベル1、活火山であることに留意）

三宅島

2015年6月5日 噴火予報（レベル1、活火山であることに留意）
2025年6月17日 火口周辺警報（レベル2、火口周辺規制）
2025年7月18日 噴火予報（レベル1、活火山であることに留意）

海徳海山

2022年8月23日 噴火警報（周辺海域警戒）
2025年2月14日 噴火予報（活火山であることに留意）

阿蘇山

2024年7月19日 噴火予報（レベル1、活火山であることに留意）
2025年7月4日 火口周辺警報（レベル2、火口周辺規制）
2025年7月25日 噴火予報（レベル1、活火山であることに留意）

霧島山（新燃岳）

2024年12月12日 火口周辺警報（レベル2、火口周辺規制）
2025年3月30日 火口周辺警報（レベル3、入山規制）
2025年4月2日 火口周辺警報（レベル3、入山規制）切替
2025年5月27日 火口周辺警報（レベル2、火口周辺規制）
2025年6月23日 火口周辺警報（レベル3、入山規制）
2025年10月17日 火口周辺警報（レベル2、火口周辺規制）

口永良部島

2024年12月6日 火口周辺警報（レベル2、火口周辺規制）
2025年2月14日 噴火予報（レベル1、活火山であることに留意）
2025年4月16日 火口周辺警報（レベル2、火口周辺規制）
2025年6月11日 火口周辺警報（レベル3、入山規制）
2025年9月5日 火口周辺警報（レベル2、火口周辺規制）
2025年9月19日 噴火予報（レベル1、活火山であることに留意）